

たことへのいわば当てつけである。援助交際女性にもこの側面はあり得るが、この側面以外にも自傷という自分自身に対する反逆心もあり得る。また魅力確認系は、リンクスの掲げた④魅力の再確認への願望そのもので、女性たちが自らの性的魅力を性愛によって確認するために不倫に走るように、援助交際でも同様なことが言えるだろう。もちろんこのことは、男性にも当てはまる。男性の場合、異性にとって外見的に魅力的に映るかという自らの性的魅力に加え、性行為が可能かという自らの性的能力（男性器の勃起）という二つの側面が存在する。

快楽系については、リンクスの②新鮮な興奮と刺激への願望に該当すると考えられる。援助交際においても不倫においても、性愛の刺激を動機とする側面はある程度、存在すると考えられる。援助交際が不倫と異なるのは、先にも述べたように不倫が愛情を媒介に形成されるのに対して、援助交際が金銭の介在によってなされるコミュニケーションであるという点につきる。援助交際女性における快楽系の類型と不倫における新鮮な興奮と刺激への願望の分類は、当の行為自体の身体的な快感を目的としている点は、同じであると言える。

最後にバイト系については、この類型は不倫に関しては、定義上存在することはあり得ない。というのも、不倫が二者間の愛情を前提としてなされるコミュニケーションであるからである。そこには金銭が介在する余地はない。金銭が介在すると、性的な行為を伴う反社会的とされる性的なコミュニケーションは、不倫ではなく、定義上、援助交際に転じてしまう。それゆえ、不倫におけるバイト系に該当するものは存在し得ない。ここから援助交際には、通常愛情によって得られることが望ましいとされる性的行為を前提としたコミュニケーションを、金銭によって代替するコミュニケーションとしての側面を指摘できるだろう。

5. 類型論の課題

本稿では援助交際女性の類型論を、彼女たちの援助交際に関する動機とその結果得られた帰結から構成を試みた。またこの類型を用いることで、

性を巡る反社会的行為者とされている、売春女性・他の援助交際女性・買春男性・不倫男女の諸動機に関して構成された類型との比較とその差異の分析を行った。これらの比較分析を通じて、本稿で呈示した援助交際女性の動機—帰結から得られた類型は、経済的要因に大きく偏っている過去の売春や、性的欲求に突き動かされる買春男性の分析とは顕著に異なっているという考察が得られた。現代日本社会における女性の援助交際は、生活苦という経済的な困窮や性欲が原因というよりも、欠落系に見られるように社会的・性的自己の充足を満たすために行われるケースが多い点である。また不倫の類型との比較を通して、援助交際における金銭と不倫における愛情という媒介項の対立が浮かび上がってきた。この対立は、古来からのあった「お金か愛か」というテーマを際立たせている。

以上の議論を通して、援助交際女性の類型から、性愛を前提とする社会的行為やコミュニケーションに関する類型の一般化を試みる。性に関する社会的行為、あるいはコミュニケーションへの参入動機と帰結には、以下の三つの原則が存在しうることが考察できる。まず一番目は、生理的、あるいは本能的原則と呼べるもの。これは性的欲求にもとづいた性的行為自体を目的とするものである。本稿で示した援助交際女性における類型では、性的行為を楽しむという点で快楽系にこれに当たる。二番目は、経済原則と呼べるもので、これは金品といった報酬を当てにするもの。本稿で示した援助交際女性における類型ではバイト系がこれに当たる。最後は、共感原則と呼べるもので、これは他者とのコミュニケーションを通じて当事者個人の内面に影響を及ぼすものである。本稿で示した援助交際女性における類型では欠落系がこれに当たる。

ここでもっとも注目すべきことは、三番目の共感原則である。性に関する社会的行為、あるいはコミュニケーションへの参入動機と帰結に対して、愛情や癒しといった側面を求める傾向が現代社会においては、大きくなっていると考えられる。日常の社会関係において愛情や癒しが得ることが困難な場合、ある人にとっては援助交際が形成する脱社会的な時空間に参入することによって